

# コア・カリキュラムに対応する教育総論の 授業充実・改良過程 ～合同授業の観点から～

An Improvement Process of the Instructional Design for Principles of  
Education Based on the Teacher Training Core Curriculum  
— In terms of the Shared Instruction System

浅田 豊  
Yutaka ASADA

青森中央短期大学非常勤講師, 青森県立保健大学健康科学部栄養学科准教授  
Aomori Chuo Junior College, Aomori University of Health and Welfare

Key words ; コア・カリキュラム 授業充実 授業改良

## 1) はじめに

生きる力の育成の観点から、家庭でのしつけや家族の中での成長発達の思い出、あるいは公民館での学習、地域や町内会での年中行事・相互交流はもとより、自分が過ごした学校での活動即ち教えられる立場、共に学習する児童生徒の立場での記憶を経験として振り返ることはむしろ容易で自然なことであると考えられる。しかしながら、自分が専門的な課程を終え卒業した後に、子どもたちへ教える立場となったことを思い描きながら、生きる力の育成へ向けての理想を胸に刻むとともに、教育の理念・歴史・制度・思想及びその相互の関係性などを自身の教育的営為の基礎として位置づけていくことを深く、また主体的に考えることは、初学の段階では、ただちには容易なことではなく、支援が必要とされる。その将来の営為の土台となる内容の重要な指針が、コア・カリキュラムに今日基づき、教育総論という科目の中で編成・形成されている。コア・カリキュラムを背景とし、確実に、かつ最適・最大の効果を生む形で、カリキュラムの目標群を達成するためには、ひとたび完成した授業計画や教材・副教材、環境面について、PDCAサイクルのもと、カリキュラムの範囲内で適宜、必要な改良を加え、一層充実させることは有意義であり不可欠であると捉えることが合理的である。そこで以上を踏まえ本稿では、コア・カリキュラムに対応する教育総論の授業の充実・改良過程を明らかにすることを目的とする。

## 2) 対象となる受講者観の側面からの充実・改良過程

教職課程を自由意思で選択し、履修登録を済ませた受講者にとって必要なことは、高校卒業後に短期大学・大学での専門的な授業そのものへ自律的に臨み、教職課程に対する問題意識を深めていくことである。また計画的で能動的学習の推進・講義に関し学習上の活用が求められる情報通信技術の向上・問題解決能力の育成といった学習スキルについても一層相乗的に高めていくことが、教育の基本的概念や学校の営みに対する理解の深化を促進すると考えることができる。そのことの実現のために、表1に示すように、受講者の興味関心を効果的に持続させ、内発的な好奇心を探究心へと変容させていくための支援をはじめとし、いかなる反応を学生が見せた場合においても即座に対応できる教員側の複数の角度からの授業計画準備が重要となる。またペダゴジーとアンドラゴジーの理論をバランスよく活用し、学生の知識、技術、思考、表現の力を総合的に高めていくための分析が授業の充実・改良過程には欠かせない。30時間の中で集団としても個人としても成長発達し、学問的に深めていくことを実感することが、将来教職に就いた際の自信へとつながると考えられる。

## 3) 教材観ならびに指導・支援観の側面からの充実・改良過程

教育総論の授業時間及び予習復習の時間においては、教材教具を含む環境、学習者、教員の三者間の相互作用が存在する。入学前までの学習とは異なり、知識として新しい分野へ受講者は接することから、用語の定義をまずはおさえた上で、知識の定着を図りながら、学習者同士の議論、学生と教員との質疑応答を通じてお互いの考えを述べ合いながら、教育総論に関する問いそのものを学生が十分に認識し、その理解を深めることにつながるような教材の改良がまずは求められる(表2)。またレディネスに合わせて教材を一層体系化・構造化させ、どのような手順を踏めば考えが深まっていくのかという点についても、学生自身が考えることを支援していきたい。さらに教材を通じて一つの問いから仮説の吟味、精選へと自発的に活動を進めていく力や、教育諸課題に対する政策提言を導出する力を一層高い水準で育成していくことが、教材改良に向けての研究上の課題である。

また教職課程の受講者の技能や思考力を有効に育成するためには、方法知・内容知・実践知のいずれにおいても、解説・板書の中で答えを与え続けるスタンスから、答えを学生が探り、迷い、調べ、補い、つかみ、発見・創造する活動に対する支援のスタンスへと変容させていくことが充実・改良上の課題である(表3)。当然ながら両スタンスは優劣や表裏の関係性ではなく、バランスよく両者が存在しながら、相互作用の中で形成的な援助を進める中で講義は展開させていくことが必要となる。その中で、学生を集団として観察する場合と個別に評価する場合、小集団の単位で支援する場合がある。いずれの場合も一般論として、序盤では対象が誤りを生じる時がある。そのプロセスを主体性向上のための生産的なプロセス、あるいは今後役に立つ前向きな誤りとしてとらえ、次なる支援が即座に可能となるような、授業準備・計画を十分に備えることが充実・改良上の課題である。

## 4) 学生の学修観・自己評価観の側面からの充実・改良過程

プロフェッショナリズムとアカデミズムを背景・土台とする教職課程の授業においては、従来型の教材観・学生観・指導観という視点に加え、履修学生が自ら高め深めることが望ましい学修観、並びに履修学生による自己評価観の二点を結合させた上で授業を充実・改良することが望ましいと考えら

れる。前三者は教員がティーチングポートフォリオの中で開発し、後二者は学生がラーニングポートフォリオの中で省察することが提案できる。教員は後二者について、学生の特性・個性を尊重し、見守りつつ必要な助言を与えることが重要である（表4・表5）。教育総論においては、学生は受講者であると同時に、ディベートやグループ協議の際にはファシリテーター役割を実行し、学習を組み立てていくことが必要不可欠である。そのためには、本時の目標は具体的な行動目標としてどのようなものであるか、どのような手段・資源を授業や予習復習の時間に活用すべきか、どのような受容的態度で受講仲間と接するべきか、学習がどこまで進み自分にはどのような分析・考察・応用が不足しているかを自問自答する姿勢を学生自らが持つことが求められよう。さらに一人ひとりの学生が今の自分の到達状況を省察し、自分にとっての目標を認識し、そのことを次なる学習活動へ効果的につなげることで、一歩ずつ前進する姿を自分で把握し、自己効力感の育成につなげることが重要である。

## 5) おわりに

授業を改良する理由はどこにあるのか。それは知識や技能の定着を一層確実なものとするためであり、学生が生涯を通じて自己調整的に学習を継続することができる資質を高めるため、実践活動の中で生きて働く思考力を高めるためである。さらには講義について教員・学生の双方が振り返ることが有効であるからである。教育総論の中で育成すべき力のうち理解の側面は、教育の制度や歴史の展開・変遷を体系的に理解しその知識をもとに他者と議論する力である。また思考の側面は、教育に関する思想を咀嚼し自分の内なるモノサシとして、教育の本質を見ぬき、自分なりの教育観を確立することができ、教師と子どもなどの概念の関係性について考えを深めていく力である。表現の側面は、学校の営みや課題について筋道を立てて調べたことと自分の考えを整理し、論理的にレポートや議論の中で表現する力である。さらに情意の側面は、今日の子どもたちのことや家庭のことなど身近なテーマから理念など抽象的なテーマに至るまで幅広く関心をもち意欲的に学びを深める力である。これらの育成を実現するための過程として、本稿の表1～5にあるような五者を偏ることなく総合的に捉え必要な準備を怠らないことが講義の充実・改良につながると考えられる。今後も、板書技術やノート活用、レポート添削などの細部の課題分析やコア・カリキュラムに対応したルーブリックの分析を含む研究課題を発展的に進めていきたいと考える。

## 6) 文献

- ① 文部科学省教職課程コア・カリキュラムの在り方に関する検討会『教職課程コア・カリキュラム』2017年。
- ② 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター『発達や学びをつなぐスタートカリキュラム』2018年。

表1 教育総論の受講者観の側面からの充実・改良上の課題

- ① 学生の生活経験や興味関心、探究心と教職課程のテーマとの連結・統合。
- ② 履修人数や診断的評価等の条件から、学生の情意・知識面での反応を予想した上で、各コマの展開をいかに構想するか。
- ③ 授業中盤から後半にかけての、思考・表現面での反応が少なかった場合の支援方法の明確化。
- ④ 将来の多様なキャリア・可能性に基づく前向きな履修が考えられ、学生の個別性への配慮をいかなるプロセスで行うか。
- ⑤ 目標達成とレディネスに照らして、小レポートを回収後に氏名をふせて教員が記述内容を読み上げる・口頭で自分の考えを述べさせる・黒板に意見を書かせる・他者の意見への質疑を書かせる・ラーニングコモンズ内を活用した講義により理解を深めさせる等どのような参加のさせ方が適しているかの分析。

表2 教育総論の教材観の側面からの充実・改良上の課題

- ① 各コマの授業中の完成・提出課題から新たな問いを学生が見つけ出し、理解の深化へつなげる教材作り。
- ② レディネスに合わせた教材の加工をいかに行っていくか。
- ③ どのような問いを各コマの前半・中盤・後半にいくつ提示することが学生の好奇心を刺激し、思考・表現の深化へつながるか。
- ④ 短期大学・大学の他の専門科目での知識・技能を生かしながら、多様な切り口で教職という営為を捉えることができる段階的・体系的な問いを作成できるか。
- ⑤ 教育的事象の根拠、解決策を学生自らが粘り強く段階的に、あるいは繰り返して考えることにつながる教材作り。

表3 教育総論の指導・支援観の側面からの充実・改良上の課題

- ① 学生たちが自分たちでどのような順序で議論をすれば各問いに対し効果的な検討ができるのかをはじめに学生たちに協議させた上で議論に進んでいくための支援。
- ② 机間指導の頻度とタイミング。
- ③ 学生の発言直後の教員からの対応と次時以降の支援との連結。
- ④ 教育的事象を的確にとらえ、議論が発展していく際の、個別性に応じた形成的評価を、30時間の途中段階での教員自らの指導方法の改善を視野に入れつつ、いかに行っていくか。
- ⑤ 履修学生が将来教育支援を行う際に、講義での知識と社会での実践活動を融合させながら、もつであろう児童観・教材観・指導観の形成への、現コア・カリキュラム内での側面支援の視点。

表4 教育総論の学修観の側面からの充実・改良上の課題

- ① シラバスを熟読し、見通しをもって学習計画を立て、15コマの講義と予習復習とをつなげることができる力の育成。
- ② どのような資源・手がかりを用いれば学習が有効であるかを考え、資源を特定・活用・補充し、活動に行き詰った場合でも方法を変えて取り組むスキル。
- ③ 授業中に他の学生の発言・発表をよく聞き、リーダーシップ・活動貢献の意識のもと協働して教育に対する考えを構築する意欲。また要点や構成を明確にして他の学生の理解を確かめつつ自分の独自の見解をまとめ発表する意欲。
- ④ お互いの考え・着眼点に気付き、比較・分析し、適宜解説・補足・調整し、そのことを共通点・違いの吟味、再提案などへ連結させていくことへの関心の高まり。
- ⑤ 履修仲間の存在を受け入れ、学習の進展上の基本方針にお互いに合意し、推進する態度。

表5 教育総論の自己評価観の側面からの充実・改良上の課題

- ① 議論への積極性など自らの学習課題を発見し自分で変容させていこうとする態度。
- ② 講義前半の解説を後半の協議やレポートへ活用できているかを自ら省察する意識。
- ③ 教材・教員・履修仲間から知らされたことをもとにして、教育理念・思想に対する、自分自身の主張を形成できたかどうかについての自己確認。
- ④ 調べ学習を通じてわからない点を躊躇せず、教員へ相談することができるか。
- ⑤ 学問へ挑戦する心情をもとに学習を継続し、目標への到達状況を自ら知り、それが自信へとつながっているかについての認識。